問題は、こうしたものを解くに当つて重要な役割を果すものと思われる。

四、社会と身体との関係

社会は精神を通じて身体に働きかける場合もあるが、直接身体に働きかける場合の方がより知られている。それは、いわゆる衞生学の領域として既に数々の問題が提出されて来ている。

私たちは、特に砂田を中心として、社会的各階級の母親の初乳のヴイターミンCの含有量を調べ、それが、富んだ階級の母親の方に多いこと、そうして更に、ヴイターミンCと乳児の発育の間には正の相関があることを確めた。

こうしたことは、保育医学が、社会的にもけつして消極的であつてはならず、新しい社会機構に対しても働きかけて行かなければならないことを示している。

五、心身の発育の問題

保育医学の立体性が主張されているのであるが、それと同時に、空間的のみならず時間的にもその立体性が考えられなければならない。つまり、それは、発育の問題なのである。特に精神身体医学などでは、幼児期の精神的外傷と、成人後の神経症との間の関係にふれている。幼児の保育医学の問題は、その時の対象である幼児にのみ限られず、将来の大人でもあると言うことを忘れてはならないと思う。

保育歯科學の必要性を提唱する

保育医学研究会
深田英朗
砂田惠一

小児歯科学と云う学問は歴史的にも極めて新しく一九二一年全米歯科医学会の際米国小児歯科医会なるものが生れたのが恐らく小児歯科研究機関の発端なのであります。その後その必要性にもかゝわらず発展は誠に微々たるもので米国に於ても、今日小児歯科医を標榜して専門に従事している者は決して多くない様であります。併し極く最近の米国歯科医学会に於ては小児歯科問題は私共の想像以上関心を持たれつゝある様に見受けられます。処が我が国の現状はどうかと申しますと殆ど無きが如き現状であります。唯小学校歯科と云う点に於て、いさゝか見るべきものがあるに過ぎないのであります。特に小児歯科学上最大の意義を持つ一才——六才の間に於ける保育歯科的な点は実に惨憺たるものであります。この一才——六才に於ける歯科的養護が何が故にかくも重大であるかと、云う点に関し

ては他日詳しく申述べたいと思いますが、要するに一才――六才までの所謂乳歯期に於ける歯科的養護の良否は、歯牙の一生の運命を支配すると申しても過言でないと存じます。

さて日本に於ける小児達の歯科医療が何故に、かくもみじめな状態にあるかについてふれてみましょう。それには幾多の原因もある事ながら、第一に考えられる事は歯科医自身が非常に小児歯科に冷たんであるか或は無関心である為です。歯科医学校には小児歯科の講座も臨床も殆んどない状態です。又小児、特に一才――六才の小児達のう蝕統計等も満足なものがありません。つまりこれ等の年令層の子供はどの位の率でむし歯に犯されて居るか、その他、何んな口腔疾患がどんな発現率を示して居るか、殆んど不明なのであります。

第二の理由は、小児診療、特に学令前の小児の歯科診療が技術的に非常に困難な事です。若し子供達に恐怖を抱かせないでスムースに小児治療を行うには、診療所の構造治療機等総て現在のものでは不可能です。其の上歯科医自身が心理的に小児の取扱いに特別の技能を持つている事も当然要求されるべき条件の一つになります。身体精神医学的考え方が小児歯科では相当重大視されるべきでしょう。併しこうした多くの要求に対し、子供の診療から得る報酬は非常に少いのです。それでは医院経営が成立しない。こうした事が小児歯科の発達しない理由の大きな一面でしょう。それに加えて日本では小児歯科医と云ふ専門技術の標榜すら許されて居ないのです。それ故専門の小児歯科診療所は現在の処一ケ所もない訳です。

小児歯科の様な意義のある、しかも特殊な設備と技術の要求される科はスペシャリストとしての保護を国家が与えない限り、絶対に成立しないのです。

次に考えられます事は、小児の歯牙の特殊性と申しますか、乳歯は永久歯と大きな相違があると云う事です。この点は特に皆様方に充分な理解をして戴きたい点なのであります。

つまり歯髄（一般に神経と云う）が犯された場合、乳歯は永久歯の様に、神経を抜き取るとか、切断するとかしての治療が全々不可能であると云う点です。つまり神経まで虫歯が到達した乳歯は、最早失われた救う事の出来ない歯なのです。而も乳歯は或る一定期間まは絶体に抜去する事は禁忌なのです。と云うのは乳歯は、永久歯発育構成上最大の役割を演じるからなのです。云い替えるなら早期に乳歯を抜去する事に依つて起る不正咬合は非常に多く、私共の研究では大体二五パーセントもあると云われて居ります。

以上の事に依つて皆様は乳歯むし歯の治療範囲は、琺瑯質及び象牙質の極く一部を犯されたものに限局されると云う事がお分りだと思いますが。併し現実の小児診療はどうかと申しますと、私共を訪れる小児患者の大部分は痛み苦しみの為、泣きわめく者のみなのであります。つまり私共はもはや何とも仕様のないケースが大部分なのです。拱手傍観たゞ〳〵対症的鎮静療法以外に手はないのです。

こうした状態では、日本の小児は歯牙の苦痛から永久に救われないのです。又進歩的小児歯科も全々成立しない訳です。これは日本のお母様達が、如何に乳歯を軽くみて、小児歯科への理解度がとぼしいかの一つの表れに外ならないと思います。こゝに於て私は今日の泥沼の様な状態から子供達の歯を救う道は、表題にかゝげました保育歯科の実践以外にないと信じるのであります。この私の考えはブンティング・デイン等の弗化ソーダによる小児う蝕の豫防発見及び、これにつゞく一連のう蝕豫防法（例えばグリゼロールアルデハイドフエロチヤン化加里・アンモニヤイオン・ビタミンK等の発見

により益々強められたのであります。何故なら極端な表現がゆるされるならば、小児歯科診療の範囲と云うものは保護者の充分な理解のもとに定期診査と完璧なむし歯豫防さえ実行されるならば、非常に簡易化され限局されると云う確信を得たのであります。事実私は小児歯牙の治療学範囲は、初期う蝕のアマルガム充塡がその限度だと信じるのであります。小児の歯科の完全な豫防的行為とむし歯豫防法の実践こそは従来の不愉快極まりない小児歯科病学中心の古典小児歯科学をほうむり去る事が出来るのであります。

さて最後に私は『保育歯科』とは一体如何なるものかと云ふ事を少々説明いたしてみましよう。そもく小児歯科と云うものは、次の様な学問から成り立つて居るのであります。

小児歯科
- a 治療学
- b 矯正学
- c 矯正学
- d 歯科
- e 保育学

口腔科防

保育歯科と云ふ言葉は従来ないのでありますが、私は母体内の胎児及び一才から六才までの乳歯期にある小児達を対象にした歯科学を保育歯科と名付けたのであります。そしてその内容は治療学的なもの以外のもので、もつぱら衛生教育的なものであります。つまり一般小児科に於て、保育医学がある様に小児歯科学に対する保育歯科学と考えていゝと存じます。或は広い意味の保育医学中の一分科とも考えていゝのです。こうした保母さん、お母様方に是非知つて戴きたい子供の歯の知識及び心得とでも申したらよいと思います。こうしたものを在来のものより一歩前進させて科学的に系統だてたものを保育歯科と名付けたいと考えて居ります。

私共が日常哺育の書物に於て目にします子供の歯科に関する項目は、非常にお粗末至極であります。甚しいのになると書いてある事もほんの数行で、極く常識的な事を並べたに過ぎない様なのがございます。又小児歯科専門医に依つて書かれたのは殆んどない様に思われます。こうした事も子供達の正しい養護への理解をはゞんでいるのでしよう。私は保育歯科の内容を私案でありますが、次の様に考えるのであります。

(一) 乳歯は何故大切か
(二) 乳歯は如何に取扱わねばならぬか
(三) 乳歯むし歯はどんな発生率を示し、それらが永久歯窩に及ぼす悪影響について
(四) 子供達の歯科口腔領域に於ける悪癖とその結果
(五) 乳歯の正しい発育
- (a) 歯が生えてくるまで
- (b) 歯の崩出
- (c) 乳歯から永久歯への移り変り

(六) 歯の形成と栄養の問題
(七) 最近に於けるむし歯予防法の発達及び口腔定期診査のもつ意義
(八) 不正咬合の常識及予防矯正学とはどんな学問か
(九) 子供達を犯す口の病気の知識
(十) オーラルハイジエストと予防歯科活動

以上は、私案で今後未だ多くの問題を含んでいるとは存じますが保母さん方には以上の事位は、是非知つて戴きたいと思うのであります。一般小学校に於てもそうですが、どうも保育園等に於ても教育が身体的な面にもう少しそゝがれるべきではないかと私は痛感いたします。最近保母養成機関の医学教育面の教授要綱を一覧する機会を得たのですが、どうも学校々々で、まちくで一貫しておらない様に思われますが、一日も早く実際上、直ぐ役立つ保育医学教育を受けられる事を希望してやみません。私が今更くどく申すまでもなく保育園、幼稚園に於ける正しい保育医学的管理の強化は、目

下の急務だと信じます。特に歯科等も専任のいる所は大変少い様です。それ故保健所辺りの保健婦が口腔診査をやられて居る所もありますが、こうした事ではむしろ行わない方がましだと存じます。

最近我が国でも婦人のオーラルハイジエスト（口腔衛生士）と云う新職業が出来、すでに卒業生もでて居りますが、将来はこうした人々を是非保育園あたりで充分活用される事がよいと存じます。口腔診査はけつして義務的診査に終らず、それらの結果を必ず家庭へ連絡し、完全な処置をとる様努力して戴きたく思ひます。これには保育園・幼稚園あたりで、保育健康手帳の如きものを製作され、たえず児童の健康状態を観察記入されるべきだと存じます。

又少くとも月一度ぐらいは、専門医達による総合的ヘルス　コンサルテーション・ガイダンス等を行う事ものぞましいと思います。

以上くどくどしく申しのべましたが、乳歯期に於ける歯牙の養護がいかに大切か又そのあり方を少しでも理解していただければ、私は幸です。

乳歯むし歯の意義

保育医学研究会委員
立教学院歯科校医　高橋勝哉

乳歯が乳幼児期に於いて、如何に重要な働きをもつているか、今迄一般に軽視されていたことは真に残念なことであります。

斯様な誤解を多くの人々に与える原因は

① 乳歯は永久歯が生え変る迄の、間に合せの歯に過ぎないから、乳歯はどうあろうとも永久歯になつてから、気をつければ大丈夫と言う考えからだと思います。

② この誤つた考え方の責任は、一般の人々のみでなく歯科医自身が一般の人々に対する乳歯の重要性の啓蒙運動の不足も、その一因と思います。

乳歯は改めて言う迄もなく、永久歯が生え変るまでの、間に合せのものではありません。乳歯には乳歯独自の働きをもつております。一口に言へば永久歯の完成を助けると同時に、乳幼児の発育に深い関係をもつております。

乳歯むし歯のもつ意義を述べる前に、乳歯は如何なる働きをもつているか簡単に述べることに致します。

① 顔・顎・身体の発育に深い関係をもつております。

適正なスポーツによつて、均整のとれた筋肉美が形成されると同様に、顔の動的美しさも顔を形成する種々の筋肉の調和のとれた発育によつて得られます。顔の筋肉の運動の一部分を司るのは食物を噛む咀嚼運動であります。乳幼児期の人間の外面的表情を現はす顔は、生活環境及び遺伝因子等に支配される場合も多いと思いますが、